ニカラグアから学んだこと

有村健二
（平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 ニカラグア）

皆さんこんにちは。現在奈良県御所市立御所小学校で教員をやっております有村健二と申します。20 年度 1 次隊でニカラグアという中米の国に行っていました。皆さんそれぞれ行かれる国は別々で、いろんなことを体験すると思うんですが一つの例として聞いていただけたらなと思います。

まず皆様それぞれいろんなバックグラウンドがあっていろんな思いで今ここに来られてると思うんですが、自分の自己紹介としてなぜ協力隊として途上国に行こうと思ったのかということをお話します。大学生の頃に教員も目指していたんですがそれと同じように海外で教師として働くこと、特に途上国の子供、日本ではない日本とは違った子供に関わることに軽いあこがれを持っていました。あと、働き始めてからなんですがこの特別現職教員の制度を知って、選択肢として海外で働くには日本人学校とこの協力隊という選択肢が、もしかしたら皆さんの中にもあったかもしれないんですが、自分の場合は日本人学校ではなく現地の子供たちと、現地の先生たちとともに現地にとけ込んで働きたいなという思いがあったので、日本人学校ではなく協力隊としてここと決めました。

簡単になんですがニカラグアという国の紹介でということで、資料を見ていただいたらわかると思います。特に話されていた言葉はスペイン語でした。生活の言葉もすべてスペイン語で、皆さんもスペイン語ご存知かはわからないんですがセニョールセニョリータ、アミーゴという感じのスペイン語でした。

国としては人口１５０万人ほどで、ニヒティー、白人とインディアンとの混血がほとんどでした。識字率７６．７パーセントと書いているんですが実際みていたらそれより低いんだろうなと感じるくらい、大人の方で文字が書けない読めない方もいらっしゃいましたし、子供でも学校に行っていない、読めない、書けない子供というのがたくさんいたように思います。

この国、ちょうど中米の真ん中あたり、コスタリカの上、ホンジュラスの下っていうあたりなんですが、国としてはこんな形で主に皆さん西側、太平洋側にすんでいらっしゃって、僕がいたのはちょっと田舎のあたりで、山のあたりに住んでいて比較的涼しい環境で生活をしていました。

人はとても優しくて、ラテンののりという感じでとても明るい。音楽があれば踊り出すっていう明るいラテンの国で一つエピソードがありまして。働いていたところは教員養成学校だったんですが一応算数の教師とともに指導、名目としては算数の教師に対する指導方法を教えるということと、生徒の学力向上という要請内容で働かせてもらったんですが、

ある日授業が 11 時からあったんですね。それで僕午前中ちょっと疲れていて職員室で寝ていたんです。それでパッて起きたら 11 時 15 分か 11 時半くらいですぎてしまっていたんです。普通日本だったらそんなことあり得ないですし、実際に僕は授業してなくて授業を見に行くっていう立場だったんですが、起きて焦って教室にいかなあかんて思って教室に行ったら、そのときに一緒に働いていたカウンターパートの先生が「ケンジ」って「おはよう、ぐっすり寝てただろ、ケンジを起こさないようにこの授業の時間だけならさなかったから」っていわれて、それぐらい仕事に対する気持ちとか、寝てたことは悪かったんですが、それぐらい明るいのんびりした感じで働かせてもらってました。

皆さんもうすぐ 3 学期始まって、授業が終わって派遣されるということなんですけど、僕も行く前にいろんなイメージしていた活動があって、まず日本で培った経験を活かして教育技術を伝えるということで、日本で 4 年しか働いてなかったんですが、この日本の教育のよさや技術を伝えるんだという思い、そして日本の教育の現状、文化を伝えて相手の人たちにわかってもらって、日本のいいところを受け入れてもらって、それを自分たちの教育技術に生かしてもらったらなっていうのがありました。

3 つ目として日本の学校、これまで大学の先生たちが話されていたんですが、日本の学校と連携して現地の学校とつなぐということを考えていました。

援助する側される側というのはあるかもしれませんが、このとき僕が思ったのは行って、僕が主に教えてこんなことやってもらうんだとすごく思っていました。

しかし実際はというと、まず教育技術を伝える経験を活かすというのがあったのですが、やはり自分の持っている物をすべて教えるんだと行っても、やはりむこうの方はそれに納得しなかったり、それがむこうの現状にあっていなかったりもする訳です。

それから 2 つ目日本の教育、文化を伝える。僕は行く前に自分の授業、自分の学校の全部の授業をビデオに撮っていったんです。算数、国語、理科、社会、習字とかこういうもの紹介できたらいいなと思ったんですが、実際紹介したことは一度もありませんでした。なぜかというと、あまりに違いすぎてもしかしたら役に立つかも、使い方かもしれないんですが見せて何の意味があるんだろう、この人たちにこれをみて何か自分の学校のこれをかえようという思いにはいたらなかったんです。だからちょっとそれはできませんでした。

3 つ目、日本の学校と連携して現地の学校とをつなぐ。先ほど大学の先生がいろんなすばらしい事例をおっしゃっていたので非常に申し訳ないんですが、僕の場合その当時の学校が荒れてまして、やったことはレポートを送ることのみでした。

本当にやりたかったのはインターネットを使って現地の人たちとむこうの学校をつないだりとか、手紙のやり取りをしたりということができたらよかったのかなと思うのですが、やはり学校の現状として勝手にできないからお前は向こうで何かやっとけみたいな、学校

は学校で自分がいない間にはちゃんと回っているんだ、現地の自分の学校は自分の学校でそのときの状況に合わせてカリキュラムもあったりして、とてもじゃないけど僕の活動に対して理解をしたり、何かできたりということはあまり考えられなかったので、とりあえずレポートを通信という形で毎月１回学校に送る、それすら学校が荒れてしまっていて申し訳ないくらい、すごいみんな戦っているのにひとり平気なこんなことして楽しいんだみたいな、そんな文章を送っていたので学校としてはどういう風に思っていたのかなというのはあります。

実際に僕がやった活動なのですが、教員養成ということで授業の計画実施、教材作成ということで大事なのは現地教員とともにというところなのですが、前に立つことはありませんでした。常に現地の先生が教えていてそれのサポートという形で関わっていました。皆さんそれぞれいろんな形があると思うんですが、隊員には２つの形があると持っていて、１つがそこの場所に行けば何らかの活動ができる、例えば学校隊員とか、学校だったら行ったら子供がいますよね。何かできますよね。でも、もう１つの形として例えば村落の方とか、行ってもその人たちがいないとか対象がいないとか何もできないというような状況があると思うんです。皆さん学校に行かれたときにも例えば自分が教えるのか、教員のサポートをするのかでも全然違うと思うんですけど、僕の場合は行ったら現地の先生がいましたのでそれをサポートする、自分はあくまで陰で相手をサポートするという形で進めることができました。

あと現地の先生が公開授業、日本で言う授業公開、研究授業にすごく興味を持っていたので、それの実施、小学校教員に向けた算数の授業紹介、後は日本文化紹介というのをしていました。

実際にやって思ったことはあくまで現地の人が主役だなったいうことです。自分がやろうと思うといろんなことがすごくできたと思うんです。ただそれが本当に現地の人が必要としているものなのかとか、現地の人にとって意味のあるものなのかということをすごく考えていて、現地の人が教えていたのでその教えをサポートする、その指導をサポートすることを通して、また一緒に授業を作る上で感じることがあれば、彼らが必要性を理解して主体的に学ぶこと、主体的に自分たちで考えることができるのではないかなと思っていました。

後は写真が続くんですが、これが一緒に働いていたカウンターパートです。主に彼が授業をして僕がサポートをする。授業をみてわからない子供をサポートしたりとか、終わった後に反省をしたりとかをしていました。

彼らががんばっていたことが３つありまして、まず算数の授業として１つは教具を使う、具体物を使うということです。教員養成学校の指導法の勉強なんですが小学校で 1、2、3

とか教えるときに具体物を使って教えたらいいんじゃないかということ。2 つめは個別指導をする。向こうの学校は基本的に前で先生がしゃべって、日本でいう大学の講義みたいな形でしたのでそうではなくて、ちゃんと一人ずつの子供をみて指導をするということをがんばっていました。3 つめは基本的には教え込みの授業でしたので、生徒に聞くことが何もなかったんですね、生徒がわからない場面が一つもなかったので、例えば生徒に聞いたりとか、生徒に書かせてその間違いから授業を作っていったりといったことを、すごくこの人たちはがんばっていました。

自分としては、教員養成学校は日本でいうと大学くらいなんですが、計算の力が全然なかったのでここは 2 桁足す 3 桁の計算とか、それを少し授業の時間をいただいてやっていたりしていました。基本的にはこんな形で授業中、問題といているときなどにわからない子供のところに行って教えたりしていました。

これは現地でやった公開授業の様子なんですが、このカウンターパートが日本のプロジェクトの研修を受けまして、公開授業にすごく興味を持ちまして、これやりたいっていったのでそれのサポートをしました。

それは現地の小学校１年生の教室なんですが、１年生がいて周りでみているのが教員養成学校の生徒です。教員養成学校の生徒に対して先生が小学校の授業を見せて、こんな風に自分たちが興味のある授業をすることができるんだよっていうのを見せていました。後は授業前に一緒に教材を作ったりしていました。

ということで少しビデオを見ていただきたいんですが。

まずひとつ、つい先日自分のクラスで話をさせていただく機会をいただきまして、そのときにこんなのあったらいいんじゃないかなということで、一つ自分が着いた当初に作ったビデオがありまして、スペイン語で挨拶、ブエノスディアスというんですがそのブエノスディアスを子供たちに覚えてもらおうということで朝の様子です。

すごい典型的な海外のビデオみたいな感じなんですけど、これいいです、という感じで、何かで使えたらなと思って無理矢理いわせてみました。

あとはこれ実際に先ほどみていただいた公開授業の様子なんですが、彼がいろんな公開授業の形をしまして、これは１年生を呼んで回りに教員養成学校の生徒全員を集めてこういう授業を見せるっていうかたちをとりました。具体物を使ったり、子供を前に出したり、子供の意見を尊重したりというのを気にして彼は授業をしていました。日本のやり方は日本のやり方なんですが前に立っているのは現地の人ということで、このときこういう形の公開授業が６、７回目でしたのでもう彼は自分で授業をたてて教具も自分で作ってもう僕は何もしない。もうこのときに僕がしていた仕事はこのビデオを撮ることだけでした。

一応自分も少しだけ現地の先生たちに話をする機会があって、このビデオも子供に見せ

たんですが先生、めっちゃスペイン語しゃべれるんだって自慢していました。笑いを取る場面がありまして、スペイン語でも先生笑いとれるんだっていってみんなに自慢していました。

ただこれ現地の先生の研修なんですがやっている内容は最小公倍数、最大公約数のところで、それすらもやり方すらわからないというところで、指導法というよりは本当に子供に教える、知識を教えるっていうかたちの研修会でした。めったに前に立つことはなかったのですが、たまにああいう風にやらせてもらいました。

ということで２年間働かせてもらって、日本では経験できないいろんなことをできたんですが、その中でも特にいろいろ考えていたことがありまして、全活動を通して考えていたこととはということで、まず一つは果たして自分の活動が独りよがりの自己満足になっていないかというところがありまして、派遣前の現職教員の研修で知り合いになった先生が、「結局最後は自己満足だ」といっていたことがすごく心に残っていて、確かに自己満足で終わる活動もあったらやっぱり自己満足で終わらせちゃいけない、現地で何か残してほしいなというのがありまして、そこの葛藤はすごくありました。また現地の人にとって意味のあるものなのか、それももし意味があると現地の人が思えば自主的に、主体的にそれを受け入れてそれを取り組んでいるのかなと思いました。このことはよく自分で思っていたんですが、技術を移転するってよく目標としてあると思うんですが、技術を移転するんだっていう風に自分で言い聞かせているんですけど、それは実際価値観を、自分の日本で持っている自分の価値観を押し付けているだけなんじゃないかなというところもすごく思っていました。

さてここで質問です。ここからは日本へ帰ってきてから思ったんですが、もしアメリカ人が日本の学校現場にみんなの自分の持っているクラスにやってこられて、「あんたがやっているやり方あかんで、もうちょっとこういう風に教えるべきじゃないの」って片言の日本語でいわれたらどうしますか。素直に聞けるでしょうか。僕多分１年目でも日本人がいうこともあまり聞いていなかったんですが、もし自分のクラスにしかも片言の日本語でいわれたら聞けるかっていわれると、実際に皆さんどうなのかなって思うところがあって、実際に自分たち、皆さんがやるにあたってやはりそういう面があると思うんですよ。行って、全然知らない先生がやってきて、そこの現地の言葉も文化も知らないのに受け入れてもらえるのかって、普通に自分の立場で考えたらそれは聞いてもらえなくて当然ですよね。そういうところ。だからまずははじめは相手を理解する、必要性であったりとか、大切さと言うところはすごく感じさせてもらいました。

その一つに文化の違いもあると思うんですが、日本だと放課後も子供たちを残して勉強をちょっと教えたりだとか、休み時間の間に教えたりだとか、授業外で教えることもあると思うんですね。それも現地で僕もちょっとやっていたんです、それもいいなぁといって

いたんですけど、カウンターパートや同僚の先生にそういうのどうなの？って聞いたら「えっ誰がお金を払ってくれるの？その間の時間の」っていう返事だったんです。まぁそれは現地の人、教師の仕事が授業をすることであって、わからなかったら子供の責任、なので授業外は仕事外なんですね。お金をもらっているのは授業の間だけでそれ以外はお金をもらえていない、だから私は働きません。っていうような考え方で、となるとやはりそういう活動は現地の人には受け入れてもらえない、じゃあ別の方法か考えなきゃいけないよねっていうようなことがいろいろありました。

また道行く人に馬鹿にされたことがありますか。日本に住んでて日本の道でボケ、アホとかいわれることはないですよね、滅多にね。ただ向こうにいると中米だったんですが「チンチョンチャン」っていわれるんですね。目が細い、アジア人ぽい人を見かけると、中国人がしゃべっている中国語のように「チンチョンチャン」って、歩いているだけでそこらかしこからそういう声が聞こえてくるんです。あとほかにもスペイン語でいろいろそういう言葉があるんですが、全然知らないのに道を去り際に「チンチョンチャン」っていわれたり、何でそんなこといわれなきゃいけないのかなって思うことがあったり、また、自分の家から学校まで行く途中の道があるんですが、そこらへんのところ歩いていたら突然後ろから石投げられまして、何やと思ったら、小さい子供が投げていて、それまでスペイン語で怒っていたんですが、そのときだけはコラーっていって日本語が出るくらいブチ切れることがあったりとか。でも現地の人はあまり何も思っていないし基本的にそういうことがあったので、一人にいっても他の人がたくさんいってくるという状況があって、これは日本ではなかなか経験できないなっていうのがありました。

そうかと思えば、”Aqui es su casa”スペイン語でここはあなたの家だよっていうんですが、初対面の人の家、友達になって初対面で家に遊びにおいでよっていわれて、家に遊びにいったらもうしょっぱないうことがこういうことだったんですね。ここはあなたの家だから自由にしてくれていいよっていうような。それぐらい一面ではそういう差別があったりもう一面ではこうやってすぐに受け入れる、すぐにフレンドリーになれるっていうのがありまして、いろいろ考えさせられました。

日本の国鳥は何でしょう、話は変わりますが。先ほど大学の先生がおっしゃられていたのが、日本のことについてよく考えてねということでしたよね。日本についての質問をたくさんされますし、ということで日本の国鳥は何だろうと思ったときに僕完全に鶴だと思ったんですね。でもそうじゃないってことに気づいて、全く知らないということを、いろんなご存知の方もいると思うんですけど、実は鶴ではないんですよね。そういうことを知りました。

最後なのですが、長期で生活したから感じられたということでやはり日本では考えない、

相手の文化を理解して、その言葉を知ってその人の輪の中にとけ込んでいくというのはすごく面白いんだなという、相手に対する好奇心ということですかね、なんでこういうときにこういう言葉を使うんだろうとか、なんでこの人たちこんな祝日があるんだろとか、なんでこんなこと祝うんだとか、なんでこの人はこんな考え方するんだろというような、人に対する好奇心、もの、文化に対する好奇心というのがすごく身に付いたと思っています。
　ありがとうございました。

【質疑応答】
質問：帰国して日本のことで逆に驚いたことはありますか。
先生：日本は忙しいなってすごく思いました。現職教員ですので帰ってきて次の日に自分の学校に挨拶に行って、向こうでは午前中しか学校がなくて７時くらいに学校に行って１２時くらいに終わるという形で、昼からビール飲んだりとか、友達と遊びにいったりとかっていう生活に比べて、日本に帰ってきて１週間後に７時から仕事で夜 9 時ぐらいにやっと終わって、帰りの車の中でも明日の授業のこと考えなきゃ行けないっていう忙しさはとても感じました。